真言宗豊山派 佐渡支所だより

第19号

令和五年　十一月　一日　発行
発行所　佐渡市新穂長畝一六三〇東光院中　真言宗豊山派佐渡宗務支所
発行責任者　加藤　龍久
編集委員長　池田　英雅

新型コロナウイルス感染症が落ち着き

真言宗豊山派　佐渡宗務支所　支所長
支所下十三番　東光院　住職　加藤　龍久

令和二年から始まった新型コロナウイルス感染症がようやく落ち着いてきました。当初の恐怖感から解き放たれて日常生活がようやく戻ってきました。

お茶の間のアイドルであった志村けんさんが死去されて、コロナの恐怖に怯えました。毎日報道される感染者数は、さらに恐怖・不安を煽りました。外出を極力控えて、マスクの着用と手指のアルコール消毒は欠かせないものでした。人との会話も距離を置いて恐る恐るのことでした。それまでの平穏な日常生活がガラッと変わってしまったことで大きな閉塞感がのしかかってきました。

そんな時に戦時中の人々の暮らしに思いを馳せました。今回のコロナ禍をはるかに超える閉塞感・ストレスが人々に覆いかぶさったと思います。世の中が平和で日常生活を安心して暮らせることは有り難いことだとつくづく思います。安心して暮らせることを思う時、ウクライナとロシアの戦争が一刻も早く終わることを切に願います。

さて、佐渡宗務支所としては弘法大師御生誕一二五〇年記念の年に当たる今年、六月五日から二泊三日で総本山長谷寺をお参りすることがなんとかできました。令和四年に本山お参りの企画を作った頃は、実施が危ぶまれました。団体参拝に出る前には抗原検査の実施、健康観察表への記入、マスクの着用、車内での会話を控える、二晩の宴会を控える等々、ご参加くださる方々のコロナ感染に最大の注意を払いました。コロナの恐怖が薄らいできたとはいえ、記念の年の今年、本山参拝の旅に参加して下さった皆様のご精進に深く感謝申し上げます。お大師様の御加護を頂戴した「本山参拝の旅」になったと思っております。

弘法大師御生誕一二五〇年記念総本山長谷寺総登嶺のご報告

支所副長
支所下十二番　観正寺　住職　三國　正純

お大師様は宝亀五年にお生まれになられ、数えて当年令和五年が千二百五十年に当たり、この慶事を奉祝し全国の豊山派総寺院に登嶺のお誘いが発せられ当佐渡宗務支所も参拝する事となりました。コロナ禍が少し落ち着いたとはいえ、まだまだ油断できない状況であり果たして参加者がどれだけ集まるかどうか不安の中、定員を五十名として募集したところ四十七名の参加を得て安堵致しました。

六月五日出発。先ず、お大師様がおわします高野山奥の院にお参りして全員で般若心経を奉読し祈願をして宿坊にて一泊。

次の日は壷阪寺・飛鳥寺の二ヶ寺をお参りして、総本山長谷寺に登嶺しました。御本尊十一面観世音菩薩様の御前にて本山の式僧の方々と、支所より参加の僧侶の方々と共に読経をして、御本尊開帳法要が施行され、参加者より申し込まれた日月牌供養が行われました。法要終了後、全員が身の丈十メートル余りの御本尊の御足元に至り、その御み足に触れて祈願をされました。次に御影堂にてお大師様の幼少期の姿をした真魚さま像に甘茶をかけて御生誕をお祝いしてから、大講堂に移動し、豊山派管長浅井侃雄猊下よりお言葉を賜り、また慶讃登嶺の記念品を頂戴しました。

最終日、七日の早朝には再び登嶺して朝の勤行に参加し、祈願をして下山致しました。この日は、室生寺・吉田寺・葛井寺の三ヶ寺をお参りして帰路に着きました。

最後に、御参加いただきました御住職、並びに檀信徒各位様には多大なるご協力をいただき、全員が無事に参拝を終えることが出来ましたこと、ここに厚く御礼申し上げます。

合掌

第七十五次全国檀信徒総代協議会に参加して

支所下二番　慶宮寺　総代　羽二生　裕

風薫る五月二十二、二十三日の二日間、東京都文京区にある大本山護国寺及びリーガ・ロイヤルホテル東京において開催された標記総代協議会に出席しました。全国から豊山派檀信徒総代三十五名が参集しました。

一日目は、研修会と護国寺観音堂参拝が行われました。研修会の講師は、宗務研究所所長　野口圭也様より「弘法大師御生誕一二五〇年によせて」という演題でご講演をいただきました。講演の中で驚くべきことは、日本のその当時の公式の歴史書「続日本後記」にも他の資料等にもお大師様の生誕が記されていないとのこと。そこで、後々お大師様が唐の不空三蔵の生まれ変わりであるという言い伝えが定説となり、宝亀五年六月十五日をご誕生の日とされたということです。言ってみれば、お大師様の誕生日は歴史的事実に基づいたものではなく、多くの人々の信仰の中で定着していったということです。最後のまとめとして、お大師様の教え（お心）を現代社会の中に生かしていくことが私たちの務めではないでしょうかと話されました。その後、全員で護国寺観音堂の参拝をいたしました。その折、執事の関本様より、「コロナ禍の三年間は寺の中に檀信徒の皆様を入れることができなかった。この春よりいつものように、寺として当たり前のことを当たり前に実施している。この嬉しさを今しみじみと実感している。」というお話が心に響きました。

二日目の協議会では、お二人の総代様からの話が心に残りました。「今に始まったことではないが、先の大戦以前の環境・教育を知る世代が少なくなり、家の代替わり、世代交代にともない菩提寺と檀家のつながりが大変変化した（薄れてきた）ようです。」「コロナ禍で進行した葬儀・墓参り等の変化（簡略化）伝統的な祖先観・死生観が次第に喪失されつつある中で、いかに次世代に繋いでいくかが問われている」等のご意見が出されました。

この二日間、誠に貴重な経験をさせていただき、心より厚く感謝申し上げ、この度の報告に代えさせていただきます。

真言宗豊山派佐渡支所下　寺院を訪ねる

豊山派佐渡宗務支所には五十八の寺院、ご住職様は三十八名います。島内各地にある寺院は、その地域に深く根ざしており、数百年にわたってお檀家様やご住職様のご尽力によって今日に至っております。

支所役員は各寺院を訪ねて、お檀家様のご尽力やご住職様のご苦労をお聞きし、地域や寺院の在り方など将来への展望をお聞きしたいと考えています。

佐和田　須川　長安寺さまを訪ねて

沢根から二見線に入って程なく「上杉軍上陸の地」という看板が見えます。真野湾を眺めて坂道を下ると静寂なる長安寺が有りました。津山照光ご住職様が出迎えてくださいました。

津山師は物静かな方です。お話が進んでいくといつの間にか仏教の教えに、僧侶としての真摯な姿に引き込まれていきます。魅力を感じました。津山師は学生の頃、法学を学びその一方で哲学に興味を持って思索を深めて来られたようです。沢山お話をお聞かせ頂いた中で「道心の中に衣食あり。衣食の中に道心なし。」という最澄上人様の言葉を書き留めました。僧侶としての覚悟をお話の端々から感じました。先代（祖父・父）から百年の時が流れ、「目に見えないけれど大事なものを受け継いでいきたい。」と話して下さいました。大事なもの・大事なことは時が移り変わっても大事と思い、受け継いで行かなければならないのだなぁ。我が身を反省しながら山門を後にしました。

相川　鹿伏　観音寺さまを訪ねて

相川万長ホテルから春日崎方面に向かいます。県道脇に観音寺が建っています。山門をくぐると、平田恵順ご住職様がきちんとした改良服姿で出迎えてくださいました。

本堂正面に鎮座する御本尊さまは聖観世音菩薩さまです。御本尊さまの周りも綺麗に荘厳されておりました。天和元年（一六八一）佐渡に配流となった小倉大納言藤原実起は泊藤山・観音寺に住み、念持仏として大事にしていた観音菩薩像（金銅仏・県の文化財に指定）は現在も寺宝として保管されています。ご住職様は仏教に関する絵本や紙芝居を沢山お持ちで、法事の折に子供たちに読み聞かせて布教に努めているそうです。大判の法語や仏様を描いた絵画、お参りの方々に仏教の教えを広めようとする説明が随所に見られ、ご住職様の布教に対する意識の高さを感じました。参考になるところが多く、私もすぐに実行したいと思います。それにも増してお話の中からご住職様の誠実で温和なお人柄が伝わってきました。

第四十五回　青少年研修会

仏教青年会　会長
支所下十番　普門院　住職　金子　大慶

令和五年七月二十九日（土）に、会長の自坊普門院において、子供十二名が参加し、青少年研修会を行いました。現在コロナ禍で、家族葬や一人葬式と例にないことばかりが起きています。

今年の青少年研修会では、子供達に二箇法要（にかほうよう＝多数の僧侶による法要・葬儀形式）を見せてあげたいと思い、青年僧侶一致団結してお集まりいただき、猛暑・多忙の中、何度もリハーサルをしました。当日は近所の若者達が見せてほしいとやってきました。法要後、「こんなお葬式の法要は、はじめて見た。自分の家の時には二箇法要をしてもらいたい。」などの感動した声が聞こえ、子供達も真剣な眼差しで合掌をして見てくれていました。

昼食の流しそうめんでは、「家よりおいしい。」「準備大変だったでしょう。」との声もありました。宝探しゲームの時には景品をゲットする為、汗を流しながら走り回り、景品を手にすると、「やったーかわいいポーチ、これお母さんにあげよう。」と子供達は大喜び。来年は、また違う企画を立て青少年研修会に参加して良かったと思ってもらいたいと思っています。

これからも、皆様のご協力をお願いします。

二箇法要の様子

青少年研修会　参加者の作文紹介

「研修会で心に残ったこと」

中川　琉千愛

私が研修会で心に残ったことは三つあります。一つ目は流しそうめんです。コロナのこともあり、人とシェアしたくなかったので友達三人で食べました。もちもちしていておいしかったです。ながれていないそうめんでも味は変わらなかったです。わたしはそうめんにのりも入れて食べました。よりおいしく食べることができました。

二つ目は金子先生のお話です。感動して声がつまっていて、すごく短くて一番、聞いていて楽でした。みんなも笑っていました。

三つ目はお経です。色々なお経を一日でたくさん覚えることができました。でもまだ一文字、一文字の意味を知らないので意味を知りたいと思いました。

今日一日では、ご飯のありがたみや、みんなとあそぶことの大切さを学ぶことができました。

「はじめて行ったお寺」

ふじい　ちさ

きょう行ったお寺でたのしかったことは、三つあります。一つ目は流しそうめんです。そうめんが流されてくるときに、はやすぎてキャッチできないときもありました。こんにゃくゼリーも流れてきたのでうれしかったです。

二つ目はみんなとやったゲームです。じゃんけんでゲームをして、けいひんがあたったのでとってもうれしかったです。

三つ目は先生のお話です。先生がおもしろいことを言うと、みんなは「アハハハハ！」とわらいます。わたしの中で一ばんおもしろかったのは、「グーとチョキでかぶと虫」です。また行きたいな。と思いました。

寺院探訪

佐渡宗務支所下三十三番　白山（はくさん）　宝蔵寺（ほうぞうじ）

佐渡市目黒町　住職　中川　博雄

山門・本堂

当寺は延久三年（一〇七一）僧、快運の開基と伝えられる。元の御本尊は虚空蔵菩薩であったが、現在の御本尊は大日如来である。当時の地頭、渡辺時正により寄進され、寺は大いに栄えたという。いつ頃か定かでないが、水害に遭い現在地へ移転したことが、北寄りの基盤整備の時に発掘された埋蔵物から明らかになった。明治元年に廃寺になったが、住職・濱田観道の努力によりすぐに復興を成した。明治十九年には火災によって本堂・庫裡など悉く焼失したが翌年には再建を果たした。寺の過去帳と「佐渡百番巡礼歌縁起」だけは難を逃れた。昭和十五年には真言宗豊山派総本山長谷寺の末に入る。佐渡においては慶宮寺の末寺である。

山門をくぐると左手に灰仏観音堂があり、観音像が安置されている。宝永八年（一七一一）新穂北方の山王薬師堂の住職・徹厳が東部佐渡に灰仏巡礼三十四ヵ所札所を設けた。それまで佐渡古仏巡礼三十三ヵ所、相川巡礼三十三ヵ所があったが、徹厳は山王の宝性院を加えて三十四ヵ所とし、合計百にして「佐渡百番巡礼」を整備した。宝蔵寺は灰仏巡礼三十番札所であった。「灰仏」とは護摩を焚いた後の灰を膠（にかわ）や糊で固めて型起こしした観音像である。仏師がいなくても作れ、費用がかからないためその後この技法は普及した。観音信仰の巡礼は大師信仰の遍路より前から盛んに行われていた。庫裡の東側奥には白山宮（白山神社）があり、白山大権現を祀る。山号の「白山」はこの神社に関係する。佐渡島内に約六十社ある白山社のうち十四社が畑野地区にあり、また小佐渡山麓の真言寺院十数ヵ寺の境内に白山社があり、白山信仰エリアを成している。

灰仏観音堂

真言宗　お寺のQ&A

Q、合掌の仕方はどうすればいいのでしょうか？

A、虚心合掌（こしんがっしょう）、金剛合掌（こんごうがっしょう）の二種類をご紹介します。

古歌に

右ほとけ　左われぞと合わす手の　なかにゆかしき
南無の一声

とあるように右の手は仏様、左の手は我々を表しています。

◎虚心合掌は一般的に使っている手の合わせ方で、両手の同じ指を合わせた合掌です。この合掌は、親指、小指を付けて開くと八葉の蓮花となり、仏と我々が一体であり、悟りの花を開けることを表したものです。

◎金剛合掌とは、両手を合わせ右の指を上にして交互に指を重ね合わせた合掌です。これは仏様への金剛石のような堅い信心を表して、仏様と私たちが一体となっていることを表します。

真言宗では、金剛合掌でお参りすることをおすすめしています。

虚心合掌

金剛合掌

編集後記

私が編集作業に係わるようになって、三回目の支所だよりとなりました。初めに考えることは、皆様が手に取った時に読んでみようと思ってもらうことです。先ずは見やすさ、写真や色合いなど考えることは様々です。文字を大きくしたいのですが内容も大切なので、一番の悩みどころです。

本号の支所だよりは、いかがでしょうか？ご感想をお聞かせください。又、支所だよりにご要望が有りましたら、菩提寺院のご住職様にお伝えください。

最後に支所だより十九号の発行にあたり、寄稿戴きました皆様にお礼申し上げます。ありがとうございました。

大慶寺　近藤